批判的思考態度と自我同一性地位との関係

藤　木　大　介
沖　林　洋　平

問 題

エリクソン（Erikson, E. H.）によれば，青年期の発達課題は自我同一性の確立である。自我同一性が確立された状態とは，「『自分は何者か』『自分のめざす道は何か』『自分の人生の目的は何か』『自分の存在意義は何か』など，自己を社会のなかに位置づける問いかけに対して，肯定的かつ確信的に回答できること」（宮下，1999）であると言える。反対に，自我同一性が確立されていない状態は拡散と呼ばれている。

このように，エリクソンは自我同一性を確立か拡散かの1次元でとらえていた。これに対し，Marcia（1966）は，自我同一性を危機（crisis）の有無，自己投入（commitment）の有無の2次元でとらえ，これらの組み合わせによる4つの自我同一性地位（ego-identity status）を考えた。危機の有無とは「いかなる役割，職業，理想，イデオロギー等が自分にふさわしいかについて，迷い考え試行する時期の有無」（加藤，1983）のことであり，自己投入の有無とは「自己定義を実現し自己を確認するための，独自の目標や対象への努力の傾注の有無」（加藤，1983）のことである。

そして，Marcia（1966）は，過去に危機を経験した上で現在自己投入している状態を同一性達成（identity achievement）とした。この地位にある場合，すでに職業選択について真剣に考え，自分の意志で決断しており，イデオロギーに関しては，過去の信念を再評価し，自分で自由に振る舞うことができるという決意を持っている。一般的に，突然の環境の変化や予期せぬ責務の発生によって圧倒されるといったことはない。

他方，危機の経験の有無に関わらず，現に自己投入していない状態を同一性拡散（identity diffusion）とした。この地位にある場合，職業については決定しておらず，また，あまり関心を持っていない。就きたい職業について言及するとしても，その日常の業務についてほとんど知らなかったり，その選択も他に選択肢があれば容易に捨て去られるといった印象を受ける。イデオロギー的な事柄については関心がないか，あるいは，誰にとっても当たり障りのない寄せ集め的な態度をとっており，万人から意見を聞くことは嫌っている。

さらに，危機の最中にあり，かつ，なんとか自己投入したいと考えている状態をモラトリアム（moratorium）とした。この地位にある場合，まだ両親の希望は重視しているが，両親や社会からの要請，そして自分自身の能力との間で妥協点を探している。きわめて重大な関心事と，時折解決不能とも思える問題とへのめり込み，当惑している。

そして，危機を経験していないが自己投入している状態をフォークロージャー（foreclosure）とした。この地位にある場合，両親の設けた目標と，自分自身が何から取りかかったかを区別することが難しい。他者が用意した姿，あるいは意図した姿になっている。かなり頑固であることが特徴で，両親の価値観が機能しない状況に直面すると極度に恐れおののく。

以上の Marcia（1966）の説明にしたがえば，自我同一性を確立するためには，自己の将来についての選択肢を検討し，試行錯誤しながらそれを決定し，目標に向かって努力し続けることが必要である。そのためには，危機に立ち向かうという意志と，実際に危機を乗り越える力，自己実現のための努力などが必要だと考えられる。そして，危機に立ち向かい，乗り越えるためには，その前提として，自己について探求したり，自己を客観視したりする力が必要であると考えられる。

このような力に関わるものとして，批判的思考（critical thinking）がある。批判的思考とは，Ennis（1985, p.45）によれば「信じるべきことや行うべきことの決定に重点を置く，反省的，理性的思考」である。また，批判的思考は態度（disposition）と能力（ability）に分けることができ（Ennis, 1985），態度はより情動的な側面，能力はより認知的な側面のことを指す（Kennedy, Fisher, & Ennis, 1991）。したがって，批判的思考を行おうとする態度や，それを行う能力を備えた青年ほど危機を乗り越えている可能性が高いと考えられる。

そこで本研究では，大学生の批判的思考の態度と能力のうち，能力の面が自我同一性地位に関わっているかを検討する。批判的に思考しようとする態度を備えた学生ほど，反省的，理性的に考えようとするため，すでに危機を経験しており，また現在自己投入している傾向があると予測される。この予測を検証するため，大学生を対象に批判的思考態度を測る尺度，及び同一性地位を判別する尺度による調査を実施し，両尺度の得点間の関係を検討する。

方 法

被験者　大学生 157 名であった。このうち，回答漏れ等のあった 7 名を除き，150 名のデータを分析の対象とした。この 150 名のうち 40 名が男性，110 名が女性で，平均年齢は 19.8 歳であった。

手続き　質問紙法による集団調査であった。質問紙はフェイスシート，批判的思考態度尺度（平山・楠見，2004），同一性地位判別尺度（加藤，1983）からなった。フェイスシート，および

教示では，感じたままに回答すること，参加は自由でいつでも辞退できること，データは厳重に保管すること，個人を特定しない範囲（学会発表等）でデータを公表することがあることを伝えた。

批判的思考態度尺度は，「論理的思考への自覚」「探求心」「客観性」「証拠の重視」の4因子からなるものであった。本研究では，平山・楠見（2004）が確証的因子分析で分析の対象とした18項目を用いた。これらの項目に対し，5段階（(1)「当てはまらない」～(5)「当てはまる」）での回答を求めた。

同一性地位判別尺度は，「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の3つの変数を測定するものであった。「現在の自己投入」は目標の自覚と努力に関する4項目，「過去の危機」は疑問・迷いと決断に関する内容の4項目，「将来の自己投入の希求」は意欲と探索に関する4項目，計12項目からなった。これらの項目に対し，6段階（(6)「まったくそのとおりだ」～(1)「全然そうではない」）での回答を求めた。なお，自己投入に関する変数が2つ存在するのは，モラトリアム地位を特徴付ける現在の危機が将来への展望を伴ったものであると考えられるからである（加藤，1983）。

結 果

共分散構造分析を行った。批判的思考態度尺度に関しては各質問項目の得点を観測変数とした。これに対し，同一性地位判別尺度に関しては，加藤（1983）にならい，逆転項目は得点を逆

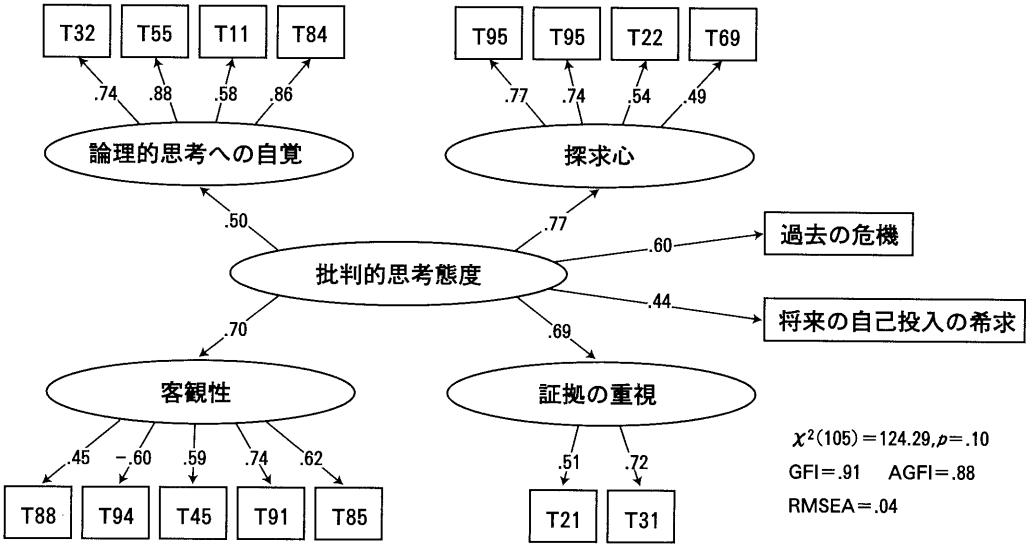

図1　共分散構造分析の結果
（数字は標準化係数を表している。また，観測変数のラベルは平山・楠見（2004）のFIGURE 1と対応している。なお，誤差変数，誤差相関は省略した。）

転し，各変数の得点の合計を観測変数とした。

モデルの構築に当たっては，まず平山・楠見（2004）の批判的思考態度モデルを構築した。その上で，批判的思考態度が同一性地位判別尺度の変数を説明する形のモデルを構築した。具体的には，批判的思考態度を規定する4つの因子の高次因子である「批判的思考態度」から「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入への希求」へ有意なパスが引けるかを検討した。

分析にはAmos 5を使用した。修正指数にしたがい，批判的思考態度の観測変数間で誤差相関のパスを引いた。また，潜在変数から観測変数へのパス係数（標準化計数）が.40を下回った場合，その観測変数を削除した。これらのパスはすべて5％水準で有意であった。

以上の手順で分析を行った結果，図1のようなモデルを得た。モデルの適合度指標はχ^2 (105) = 124.29, p = .10, GFI = .91, AGFI = .88, RMSEA = .04であり，十分にデータを説明していると判断した。ここから，「批判的思考態度」因子が「過去の危機」「将来の自己投入への希求」の変数を有意に説明していることがうかがえる。

考 察

共分散構造分析の結果から，「批判的思考態度」と「現在の自己投入」との間に関連は見られなかった。つまり，批判的に思考していると自覚していることと，自己を定義づけて目標に向かって努力していると認識していることとの間に関連がなかったと言える。「批判的思考態度」と「過去の危機」や「将来の自己投入への希求」との間には関連が見られたことも考え合わせてこの原因を考えると，自己の内省的な面と自己を構築していく実行的な面との間に乖離が存在することが挙げられる。つまり，批判的思考態度は「過去の危機」のような内省的な面や，「将来の自己投入への希求」のような意志に関わる面の予測はするが，何をすべきか自覚して実行するか否かに関しては予測しないということである。自己投入しているか否かは，むしろ達成動機（詳しくは宮本・奈須（1995）を参照）と関わっているのかもしれない。つまり，批判的な思考態度で自己について探求したことで，現実的な結果期待や抗力期待を持つことができ，目標へ向かっての行動化ができるようになるのかもしれないということである。

一方で，「批判的思考態度」と「過去の危機」との間に関連があることがわかった。ここから，批判的に思考しようとする態度を形成している学生ほど，自己の社会的位置づけなどについて悩んだ経験がある傾向にあると言える。過去の危機を経験しているかいないかは同一性達成地位とフォークロージャー地位とを判別する。したがって，批判的思考態度が形成されているか否かは，現在自己投入してる場合，その自己投入が自分の明確に意志決定によって行われているのか，親などの意向にそのまましたがって行っているかを左右していることが示唆される。

また，「批判的思考態度」と「将来の自己投入への希求」との間に関連があることもわかった。

ここから，批判的に思考しようとする態度を形成している学生ほど，自己の目標を設定し，それに打ち込みたいと考えている傾向があると言える。将来の自己投入を希求するか否かはモラトリアム地位と同一性拡散地位とを判別する。したがって，批判的思考態度が形成されているか否かは自我同一性を確立しようと試みているか否かを左右し，また特に，将来への自己投入への希求が強い場合，まさに危機のただ中にいると考えられる。

以上をまとめると，批判的思考態度を形成している学生ほど，過去の危機を経験していたり，将来の自己投入を希求しているといえる。批判的思考態度が自我同一性を確立しようとする姿勢へ影響を与えているといえるだろう。一方で，一般的な認知能力と自我同一性の確立との関連に関しては，高橋（1984）がそのレビュー論文において，自我同一性地位間で知能差が認められないとする研究を紹介している。したがって，自我同一性の確立のためには，単純に言語や数，記憶などについての能力が高いことが重要なのではなく，さまざまな事象に対して反省的，理性的に思考できる態度や能力が必要と言えるだろう。あるいは，自我同一性と批判的思考は重なりが大きな概念同士なのかもしれない。

青年にとって自我同一性の確立は，職業を主体的に選択していくために非常に重要な課題であると考えられる。そういった点で，青年がどのような態度を形成し，どのような認知能力を備えれば危機を乗り越えられるのかということを検討することは，大学生のキャリア支援などを計画する上で意味のあることだと考えられる。本研究の結果からは，批判的思考態度を形成することがその一助となるということが示唆される。大学生のキャリア支援のためにも，批判的思考力を育成するカリキュラムや授業の開発を行うことが望まれる。

なお，本研究では批判的思考態度のみを検討対象としたが，批判的思考能力が自我同一性の確立とどう関わっているかについても検討すべきであろう。危機を乗り越えるためには，自己内省し，自分なりの回答を得なければならないため，ある程度以上の批判的思考能力が必要となると考えられる。そういった点で，批判的思考能力も自我同一性の確立過程に影響を与えていると予測される。平山・楠見（2004）は，批判的思考態度としての探求心が文章読解からの結論導出の際のバイアス回避に影響を及ぼすことを示している。これは批判的思考態度と批判的な読解能力との間に関連があることを示すものであるが，批判的思考の態度と能力との間の関連については未だ不明な点が多い。批判的思考態度だけでなく，批判的思考能力も自我同一性地位との間に関連があるかを今後検討したい。

引用文献

Ennis, R. H. (1985). A Logical Basis for Measuring Ctritical Thinking Skills. *Educational Leadership*, **43** (2), 44-49.

平山るみ・楠見　孝（2004）．批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響―証拠評価と結論生成課

題を用いての検討― 教育心理学研究，52 (2)，186-108.

加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究，31 (4)，292-302.

Kennedy, M., Fisher, M. B., & Ennis, R. H. (1991) . Critical Thinking: Literature Review and Needed Research. In L. IDOL, & B. F. Jones (Eds). *Educational Values and Cognitive Instruction: Implications for reform.* New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 11-44.

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* 3 (5), 551-558.

宮本美沙子・奈須正裕（編）(1995). 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学 金子書房

宮下一博 (1999). アイデンティティ 中嶋・義明・安藤清司・子安増生・坂野雄二・繁枡算男・立花政夫・箱田裕司（編） 心理学事典 有斐閣 p. 4-5.

高橋裕行 (1984). 自我同一性と Marcia の同一性地位面接 批判的展望 教育心理学研究，32 (4)，320-328.